

状況に左右されない視点を持つとう

参加型システム研究所 理事長

神奈川大学 名誉教授

橘川 俊忠

愚行重ねる劣化した政治家達

今年前半の政治の世界で目立ったのは、劣化した政治家達の愚行の数々であった。妻の妊娠中の不倫の挙句に議員辞職、不倫相手とハワイで結婚式の真似事で御詫び行脚の二世議員、秘書への暴言・暴行で訴えられ、雲隠れした女性議員、新幹線でお手手つないで若い地方議員との交際がバレたタレント議員、三文週刊誌をにぎわす話題には事欠かなかった。

こんなどうしようもない愚か者たちのことはともかく、閣僚の愚行となると影響は大きい。何度も失言を繰り返し、最後には自衛隊の政治利用を指摘されて辞任に追い込まれた防衛大臣、辞任は免れたもののしどろもどろの答弁で再任されなかった法務大臣、文書があったのか無かったのか答弁を二転三転させた文科大臣、その他閣僚にも「失言」は絶えることがなかった。そして何よりも、関与の状況証拠は十分すぎるほどあるのに証拠隠しと三百代言的言辞を弄して責任逃れを図る総理大臣とその側近政治家及び官僚達。一強政治のおごりとか油断とかでは済まされない、政治家の劣化も行くところまで行ったというしかない状況である。

ところが、それでも内閣の支持率は30%程度で下げ止まり、あわてて前倒しをした内閣改造で支持率は回復傾向すら見せているという。もはや、個々の政治家の劣化とか水準の低下というようなレベルではなく、国全体の政治が機能不全に陥っているように見える。民主主義を基礎にして成立しているはずの政治が、民主主義を機能不全に陥らせているといってもよいかもしれない。

脆くなった政治

こういう政治家の劣化・政治の機能不全という現象は、どうやら日本に限ったことではなさそうである。ツイッターで暴言を吐き散らし、政権の主要人物を次々に更迭し、疑惑にまみれても闇雲に信じる支持層だけを向いて暴走を続けるトランプ大統領、ルペンの当選は阻止したが、既成の政

党勢力は激減し、マクロン一人勝ちになったかと思ったら、そのマクロンの支持率も急落という安定感を欠いたフランスの政情、内容は異なるが、不安定化する民主主義という点では、共通する現代政治の病理が現れているように見える。

その病理は、たとえてみれば、子供がコーラやハンバーガーのようなファーストフードばかりを食べて、骨が弱くなり、骨折しやすくなった症状のようなものではないか。自分の好みに合う気に入った意見ばかりを求め、じっくり考えることをしなくなった頭脳は、石灰化して折れやすくなった骨と同じである。それは、一見硬化して丈夫になっているようだが、ただ折れやすくなっているだけで、政治についていえば、状況の変化に対して柔軟に対応できる力を失っている状況と同じである。だから、でたらめな情報に振り回され、愚かな政治家を信じこむか、その時その時のムードに流され、思わざるブームを巻き起こすかと思えば、たちまちそれにも飽きて別の対象を探し回ることになる。

政治は、そういう意味で、劣化しているというより、脆くなっているといった方が適切かもしれない。それは、民主主義という骨が、いつボキッと折れるかもしれないという危険をはらんでいる。

とにかくじっくり考えよう

脆くなった政治を治療する特効薬は、残念ながらない。子供の偏食を治すのがどれほど困難か、それは長期にわたる生活習慣の改善の努力を要求する。政治の世界でも同じである。じっくり考え、気に入らない意見にも耳を傾け、粘り強く説得する習慣を身につけること、まさに民主主義を思考のレベルで習慣化する努力を重ねるしかない。世界が複雑になればなるほどそのことは重要になる。また、複雑化した世界は、自分達の生活のあらゆる場面で相互に関係している現実がある。自分達の生活をじっくり振り返ってみれば、状況の変化に右往左往しない確実な視点が得られるはずである。

(きつかわ としただ)